



【小学1年生・2年生】

特選

ぺんぎん

若葉小学校1年

藤田 啓瑚

ぺんぎんさんぺんぎんさん
 ぺたぺたあるく ぺんぎんさん
 ずっと ぺたぺたあるく
 おかあさんぺんぎんは べたべたあるく
 こどもは ぴちぴちあるく
 ぴちぴち ぺたぺた ぺたぺた
 いろんなおとだ ぺんぎんさん
 ぴちぴち べたべた あるく
 どんどんまえにすすむ
 ぺたぺた ぴちぴち ぺたぺた
 いいおとだ

(評) ぺんぎんのあるきかたって、かわいいですね。よくぺんぎんをみて、そのかわいさを、あしおとであらわしてくれました。
 あしおとが、たのしいおんがくのようにです。

(彦根文芸協会 西村 和野)

準特選

わたしのかぞく

稲枝東小学校1年

大西 詩楽

わかちゃん
 いうこときかない
 わがままでやさしい
 なすびがきらい
 すきなあそびは いしあつめ
 ちち
 あんまりしゃべらないときは すねている
 べんきようをおしえてくれる
 いびきがうるさい
 いちりんしゃのれんしゅうをいっしょにしてくれ
 かか
 ピアノのれんしゅうきびしい
 いっしょにねてくれる
 からいラーメンがすき
 かかといくあさのさんぽがすき
 わたしのかぞく たのしいかぞく
 あんまりやなあとおもうときもあるけど
 大すきなかぞく

(評) かぞくひとりひとりの、すきなこと、きれいなことも、すべてまるごと、かぞくなんです。すてきなかぞくですね。

(彦根文芸協会 西村 和野)



佳作

わたしのゆめは

城南小学校2年

栗本 桜奈

わたしのゆめは
 きまつたような
 きまつてないような

できればゆめは
 パティシエがいい

じゃなかったら

アイドル

じゃなかったら

アロマコーディネーター

ほんとうのわたしのゆめは
 なんだろう

いつまでもいつまでも

ゆめはきまらないのかな

わたしのゆめは

なにがにいますか

佳作

ともだち

若葉小学校1年

田中 華

わたしのともだち
 そらちゃん えりかちゃん

ともだちうれしいな

なにしておぼろ

いっばいあそんで

たのしいな

そろそろ

おやつをたべたいな

おなかをばんばんになったら

そろそろあそぼうか

みんなは たのしい一にちだ

みんながあそんでいるうちに

くらくらおぼろ

かえっておひるねだ

わたしもおやすみなさい

ぐーぐー

入選

かぞく

城東小学校1年

尹 清蕙

わたしのおかあさんは
 めがねをかけて

わたしのおとうさんは

おこりんぼ

おとうとはいたずらっこ

わたしと

おとうとは

まいにちけんかする

おふろどきに

またけんかする

そして なかよく

おやすみなさい

入選

きせつ

若葉小学校1年

長束

椿

はるだ はるだ はるになつたら
 二ねんせい
 なつだ なつだ なつになつたら
 プールにいこう
 あきだ あきだ あきになつたら
 はっぱがちゃいろになつて
 おちてくる
 ふゆだ ふゆだ ふゆになつたら
 ゆきあそび
 みんな みんなあそびだす
 きせつが かわつてたのしいな

【小学3年生・4年生】

特選

言葉

城北小学校4年

大鳥井 理乃

たった一言で
 みんなが変わる言葉
 言葉はふしぎだ
 ただ言つたつもりなのに
 悲しませる
 ただ心配してあげただけなのに
 喜んでくれる
 言葉は
 花みたいだ
 喜ばれたら
 あざやかなコスモスに
 悲しませたら
 こわくてぶきみなどく花に
 うれしいうそは
 ちよつぴり痛いバラになる
 言葉は

その人の心から生まれてくる花だ
 やつぱり言葉はふしぎだな

(評)「言葉は花みたいだ」と気づいた作者。そこから、このほのぼのとした詩は生まれました。だけれど毎日あたりまえに使っている言葉ですが、「あざやかなコスモス」になったり、「こわくてぶきみなどくの花にもなる」という言葉のふしぎさが伝わってきます。まさに『言葉は』「その人の心から生まれてくる花」ですね。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

準特選

ねこのある日

城南小学校4年

石橋 明莉

ねこは ある日

とてもぐっすりねていた

「ねこもつかれているんだなあ」

そう言うと

ねこはしつぽをふつて なにか伝えた

でも意味は わからなかった

ねこは ある日

たくさんおかわりをした

この前はたくさんねていたから

わからなかったけど

「まだ元気！」

と伝えているみたいだった

(評)ねこのある日のようすをやさしい目でじっと見て、ねこの気持ちを知らうとしてるところからこの詩は生まれています。「しつぽをふつてなにかを伝えたい」と感じとったり、「たくさんおかわりをした」と気づいたりしています。作者とねこの思いが通い合っているようで、心あたたまる詩に表わされています。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

佳作

風のあやとり

城北小学校4年

木原 寧音

トンボが群れて飛んでいる

風であやとりするように

秋がゆっくり進んでゆく

私とトンボの目に映る

コスモスゆれる静かな夕暮れ



佳作

満月

稲枝北小学校4年

大西 陸

満月だ!!きれいだな

満月は朝になると

太陽と交たいしてしまった

次の日はあれ?

月が欠けている

なん日もたつて

月を見た

えー!!

月が半分になっちゃった

あれれ?

おつかしいぞ

「お月さくん」

なんで欠けているの?

それはねえ

光でかけているように見えるの

へー

また何日もたつて

お!

月が!!やった

満月にもどつてるぞ

入選

ふつう

城北小学校4年

藤田 星莉

ふつうなんてない
自分には
自分のふつうがあつて
その人には
その人のふつうがある
人とちがつても
それが自分のふつうなんだから
その人のふつうにあわせなくても
それがその人のふつうで
その人だけの
自分だけのふつうだから
みんながふつうじゃないといつても
それが自分のふつうだから
みんなに何を言われても
自分のふつう
その人のふつうは
変わらない

入選

かわいい弟

城東小学校3年

片瀬 実優

弟ってかわいいな
どんなときでもあまえてくる
あやまり方もかわいいし
なんでもかんでもかわいいもん
弟っていたずらばかり
いつもけんかしてしまう
だからどうしてもおこっちゃう
なぜかわたしがおこられる
でもそこがかわいいよ
弟ってすごいな
なんでもがんばり
あきらめない
そんなところもかわいいよ
家族みんなの人気者
こまることもいっぱいあるけど
それもぜんぶかわいいな

入選

コロナなんていなくなっちゃえ

城東小学校4年

樋口 心陽

どこかへ行きたいなあ
楽しいところへ行きたいなあ
ゆうえん地に行きたいなあ
りようやプールにも行きたいなあ
コロナなんて
いなくなっちゃえ
たくさん たくさん
ねがつてる
家にいるのは いやだなあ
いつになったら
コロナなんて いなくなるんだろう

【小学5年生・6年生】

特選

楽しい日

稲枝東小学校6年

松山 真愛

朝起きて外を見ると

雲がなく

はなやかな空気とすずしい風

天気も良い

これは今日も楽しい日になりそうだ

ゆらゆらとゆれる植物

こんな朝は 初めてだ

外を見ながら良い気分でご飯を食べる

こんなけしきを見ると

今日がわくわくする

今日は楽しい日になりそうだ

(評) 作者の感性が、行間からあふれでてくる、とてもさわやかな作品です。五行目と最終行の「楽しい日に…」のくりかえしに、希望のある思いがえがかれていてほっこりします。

これからも詩をかき続けていってほしいと願います。
(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)

特選

ぼくはあのととき

城東小学校6年

大久保 智貴

ぼくはあのととき言ってしまった

ぼくはあのとときおこってしまった

思いかえせば

君にしたことはいくつもある

君の気持ちも知らずに

ぼくはあのととき

やってしまった

ぼくはあのととき

ぼくはあのととき…

だからぼくは

心のそこからこう言った

「ごめん」

君は笑って

「いいよ」と言ってくれた

あの時から

ぼくたちは もっと仲良しになった気がする

(評) 作者の一番言いたかったこと、それは二連目の「心のそこから……」に続く「ごめん」です。素直でしかもきちんと自分を見つめ、描きあらわせた作品となり、最終連(行)で読み手にもホッとした気持ち伝わり、すぐれた作品となりました。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)



準特選

あいさつしたよ

平田小学校5年

小山田 悠

朝が 私にあいさつしたよ
 おはよう はやく起きなきゃと
 嫌だとふとんにくるまつて
 聞こえてきたよママの声
 早く起きなさい ちこくする
 とび起き急いでじゅんびして
 外は少しさむい秋の朝よ
 私もちゃんと感じたよ
 おはよう太陽行つてきます
 夕日が私にあいさつしたよ
 暗くなるから帰らなきゃと
 急いだ足をふと止めた
 見上げた夕日は真っ赤つか
 苦手な秋の好きどころ
 帰つてすぐにごはん食べ
 お風呂でぼつかぼつかあつたまる
 ベッドの中から空を見た
 きれいな月と星たちが
 明日がくるのを見守っている

(評) 作者自身の生活感があふれ幸福感も伝わり、素敵な作品となりました。誰もが体験している日々の暮らし方にストーリーを持つて自分らしく描かれています。これからの詩を描き続け、次の物語をみつけていってくださいね。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)



準特選

僕とみんな

平田小学校6年

水原 千華

「辛いけど…」
 がまんしてがまんして ふたをする
 ふたをして笑っていけばほめられる
 ふたをしてふうじこめた物はどこに行く？
 どこにも行かずに残っている
 簡単に消えはしない
 ずっと残る
 だから 吐きすてる
 それが人間
 「うれしい」
 アリガトウ アリガトウ アリガトウ
 言葉を吐き続けても何も無い 楽しくない
 わかってる
 わかってるのに
 かわつてるのに
 変わらない 変わりたい
 みんなと一緒に笑いたい 泣きたい
 「がんばった」 って言いあいたい
 みんなに救われた
 心からのありがとう

(評) 思春期の入口に立つ作者。一連目の心の悩みや迷いや二連目の願いごとが素直なことばで描かれている作品です。思わず読み手も寄り添いたくなり、やさしいことばで表現されて「みんなへの思い」がかんじられるすぐれた作品となりました。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)



準特選

ただの日

城北小学校6年

濱岸 遙真

ただの日
 そんなただをつみかさね
 一日 一年 十年 百年
 ただの日
 ただの日と想っていて
 そのただの日は一生に一度きり
 ただの日
 そんなただの日だと思っても
 その日は二度とやってこない
 いつも同じただの日と思っても
 一つも同じ日なんてない
 ただ ただ
 そのただを そのただを
 もう少し大切に

(評) 「ただ」ということは昔々から使われていて万葉集にも出てくることばと辞典には載っています。百年どころではない古いことばを作者は見事に今の詩として形に表せていてただの頭が下がります。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)

佳作

絵の具とパレット

稲枝東小学校6年

平居 里那

帰り道空を見る
 雲が動き
 空泳ぐ
 帰り道空を見て
 色が動き
 まぎる
 それを風や雨が
 かざる
 雲はパレットになり
 空の色は絵の具になっていく
 空の色がまじると雲に色をぬり
 雨がふる
 そんなふう
 に
 天気が変わる

佳作

えんぴつさん

城北小学校5年

牧野 里愛

ぼくは えんぴつ
字をかいてもらうことが大好きさ
ぼくは学校が大好きさ
だって 学校は いっぱいぼくを
使ってくれるから
うれしいな
でも ぼくははずれ小さくなる
どんどん小さくなる
いつかは捨てられる
だけど たくさん使ってくれるから
こうかいはない

佳作

ストーブ

城北小学校6年

井尻 凰誠

ぼくの名はストーブ
寒いせつがやってきた
おれの出ばんがやってきた
みんなの体を温めることができるのは
おれしかないぜ
でもおれにも温められないものがある
それは心さ
冬はおれをつかってくれよ
だれかおれのこころも
温めてくれよ

佳作

ぼくの明日

城東小学校6年

居原田 莉桜

明日は何が起ころかな
新しい服がしょうかいされるかな
新作のスイーツが売られるかな
新しい番組が始まるかな
明日は何が起ころかな
かけつこで一番になるかな
テストで百点とれるかな
忘れものしちゃうかな
ぼくはきつと
今日と明日をくりかえして
「ぼく」になっていくんだ
明日は何が起ころかな
明日がくるのが楽しみだ！

佳作

ロボットお母さん

城北小学校5年

田中 未来翔

ぼくが 朝起きると
 「おはよう」
 「あさごはんできたよ」 って言う
 ぼくが学校に行くとき
 「わすれものない?」
 「いつてらっしゃい」 って言う
 ぼくが学校から帰ると
 「おかえり」
 「学校どうだった」 って言う
 夕方になると
 「宿題おわったの?」
 「夕ごはんできたよ」 って言う
 夜になると
 「おふろ入った?」
 「もうねなさい」 って言う
 ぼくのお母さんは
 毎日毎日同じことを三六五日
 ロボットみたいに言いつづける
 でもそれは ぼくがまだ
 何もできていないからだろう

入選

雨のふる朝

城北小学校5年

桐畑 凌斗

雨がふると
 朝のたいようといつしよに
 ピカつとかがやく
 水のしづく落ちていくすきに
 しずくとしずくのあいだを
 たいようの光がぼくを照らす
 雨はきたなくない
 ピカつとかがやく
 きれいだよ

入選

雨と虫

城北小学校5年

吉田 悠生

ザーザーと雨がふる
 新しいかさ
 水はじき
 チャプチャプピチピチ
 いい音だ
 あさがおの上に
 かたつむり
 のこのこゆつくり歩いてる
 あじさいの上には
 かえるが二ひき
 二ひきでいつしよに走っている
 ポツポツポツ雨やんで
 虫が一気に帰っていく

入選

にじ

平田小学校6年

井上 日和

もし ないてしまっても

いいんだよ

笑顔という 太陽があるから

雨のなみだと太陽という笑顔で

にじが 生まれる

だれかが泣いても だれかが笑ってくれる

どちらかが 欠けていけば

何も生まれない

今でも 世界に たくさんのにじが

あふれているだろう

入選

空手のできごと

城北小学校6年

富田 大和

ぼくは試合にでも一分三十秒で終わり
努力しても一分三十秒で終わり

だけど始めて四年の一試合だけ勝てた
まだまだ終われない

始めて五年二試合め
勝てるか勝てないかまできた

そこでコロナウイルス
けいこもできない

試合もなくなつて
早く試合ができないかなと思つていた時

コロナがおさまつて試合ができた
全国大会の予選

ぼくはきんちようした
だけど試合に勝てた

初めて勝ち残つた
二位になれた

ぼくはお母さんにほめられた
うれしかった

六年目の初めてのメダル
ぼくの空手のできごとは終わった

空手ならう人増えたらいいなあ

空手ならう人増えたらいいなあ

入選

よろしくね

城北小学校6年

武田 結良

今日は新しいノートを使う

お気に入りです ずっと残しておいたのだ

一ページ目をめくる

きれいな四角が ずらりとならんでいる

「よし」

私は 一度しんこぎゆうすると

一文字目を書きはじめた

一本一本 とめ はね はらい

ゆつくり ていねいに…

絶対 きれいに書くんだ

すらすらと えん筆をすべらせていく

上からノート全体を見る

・・・

思つたように 書けない…

えん筆が思つたように すべつてくれない

「まあ…いつか」

また 失敗

いつも こんなスタート

でも いいんだ

これから このノートといっしょに

勉強していくんだ

「よろしくね」

入選

運動会

城北小学校6年

牧野 圭佑

今年はなんだか ちがつてる

運動会が ちがつてる

毎年声が 聞えたが

今年はずか 運動会

リレーの応えんは はく手になった

他の学年は 教室へ

ちよつぴりさみしい 運動会

今年はなんだか ちがつてる

運動会が ちがつてる

元気な声を 出すために

コロナウイルスに うちかつぞ！

入選

虫からの命のメッセージ

城北小学校6年

ホークス レオン

命はとても大切だ

たとえその命が

小さな動物のでも 大きな動物のでも

大切さはかわらない

虫の命はどうでもいい

そう思つて殺しているあなた

そういう人が本当のわるい人ですよ

自分かもし殺人はんに出会つてしま

にげないといけないと思つたとき

虫があなたに殺されそうになつたとき

いつもそのこわいいやなきもちですよ

もつと自分の いや

すべての命を大切にしなさい

入選

ガムのゆめ

城北小学校6年

堀尾 憩

ガムをかむ

モグモグモグとガムをかむ

モグモグかんだら

口いっぱいゆめが広がる

そのゆめをブクーツと

ふくらませて

パンとわれたとき

ゆめがとび出す

入選

詩が思いつかない

城北小学校6年

平尾 富葵

学校で出された詩作り
学校でも
帰り道でも
ならいごとでもかかんがえた
思いつかない
どうかだれかかんがえて
思いつかない
家に帰るが
なにも思いつかない
時間がない
もうねむたい
みんなもなやんでいるだろう
一つの視点に合わせ
自分の中
時がとまっている
まぶたがおもい
「これでよし」
おやすみ

入選

おつかい

城北小学校6年

柴田 莉子

とことことこ とことことこ
地面の上を歩いてる
とことことこ とことことこ
八百屋さんへ向かつてる
右手にはお金 左手にはふくろをもっている
とことことこ とことことこ
おっと八百屋が見えてきた
あと少し あと少し
ようやく八百屋についた
本当は おつかいいやだったけど
ペロペロキャンディもらえたり
きてよかった



【中学生】

特選

つなみと海と命

中央中学校1年

上田 てる葉

いつもはおとなしい海
 おとなしい性格の海
 でもときどき「イラッ」とおこつてる
 おそろしいほどに暴走する
 でも ずっとおこつてはいない
 時がたてば おとなしくなる
 でも すべてをうばつていく
 開発が進んだ町 美しい森をうばつていく
 海はこわいかもしれない
 でも それだけじゃない
 海も生きている
 生きている上で色々な感情は芽生える
 しかたがないかもしれない
 でも ゆるせない やりきれない
 そんな思いが海に向けてこみあげてくる
 でもそんな海が好きだ
 海の幸はおいしい
 海の景色は美しい
 海は私達に命を分けてくれる
 だから うみが うみが

好きだ 私は 好きだ

たとえどんなに おこつても

また元通りおとなしくなる

私は海を愛するよ

いつまでも いつまでも

美しい海がずっと見られるように

守っていききたいと 思う

(評) 海を持つ美しさと怖さの両方を感性豊かにいきいきと描いています。海を人のように心を持つ存在として描く。その方法を難しい言葉で、擬人化ぎじんかと言いますが、この作品の中では、海と私の持つ決して単純ではない様々な思いが、あらためて「感じる」ことの大切さ、「考える」ことの大切さを教えてくれる気がします。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)

準特選

花

西中学校3年

松本 寛汰

浜辺に着く 音が響く 上を見る黒い空と
 光る花 横を見る 横にもある 明るい笑顔
 の花 前を見る 風とおなじくなびく波 君
 が走る 水が飛ぶ そして美と美がまざり合
 う 美しい どんなどこでも君と
 いれば 花がさく 一輪の花が どんなどこ
 で花ひらこうと 美しい

(評) 風の吹く水辺に咲く花を美しいと思つて観ているのですが、本当は、風景を美しくさせているのは花ではなく一緒にいる『君』なのです。人の存在の大きさが伝わってきます。行を分けて、散文詩のかたちで書かれています。行分けにして書けば、読んだ後により余韻の残る詩になったと思います。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)

佳作

蛙かわず
貪むさぼり

西中学校3年

吉田

遥斗

非常識な母蛙が
蛙の涙を見ずのみこんだ
水連が五百く
淋しき蛙して眼

【総評】

(小学生の部)

今年も詩の部門の応募作品は少数で残念に思いました。俳句や川柳にくらべると、詩には時間と少し多くの苦勞が必要ですが、それだけに自分の思いや夢など、心の内を広く深く表すことができます。

応募いただいた作品の多くは、家庭や学校・自然などの中で豊かに感じとり、自分の発見や思いをすなおな言葉で表現できていました。

まい日の暮らしの中で、はつと見つけたり、あつとおどろいたり、喜んだり、何かを好きになったり、失敗したことなどの経験はだれにもいく度もあります。そのことを感じたままにすなおな言葉でつづるのが詩です。みなさんの日記の中にこそ、詩がかくれていると思います。

「きょうは詩を書いてみよう。」と詩を作る場を設けていただけるとうれしいです。

(中学生の部)

コロナ下で二年以上が過ぎようとしていますが、ウイルスは変異を繰り返し、不安は増すばかりです。特にこの間の学校生活を振り返ると、大切な時間をこんな状況で過ごさなければならなかった皆さんたちに、胸が痛みます。

今年度の中学生の応募は、昨年と比べるととも少なかったのですが、これも学校全体の余裕の無さを考えると仕方ないのかもしれない。ただ応募作品は、自然と自分をテーマにした、とても感性豊かな味わい深い作品でした。自然をただ自然としてとらえるのではなく、人と同じ「いのち」を持つものとして感じることや、人と自然とのかわりがどれほど大切なことを考えようとすること、たびかさなる自然災害や新種のウイルスなどをきっかけに、私たちは今までとはち

がった方法で、人とも自然とも、愛情深く慎重に付き合っていくこと
になるのでしょう。

(彦根文芸協会

谷口 明美)

(彦根文芸協会

尾崎 与理子)